２１世紀の日本のあるべき姿

西澤　潤一

①　近代社会の特徴は個人主義であると考えるが、自分達の恵沢を確保するために、相応の出精が義務付けられる主旨の記述が見当たらないので、利己主義の存在をゆるし、その結果、国民は利己主義と個人主義の相違点すら認識していないようにさえなっている。

この影響の一つが、自己の生存する権利だけを主張するようになって、自己中心主義の一方的福利の享受だけを要求・主張していることが現代社会の病根の出発点である。

この点を補充して個人主義人間像を、前文の中に浮かび上がらせることが必要である。

②　世の中の人は、現在でも再軍備の可否に熱中して、この点のみを注目しているが、既に軍事戦争の結果の第二次世界大戦後、次第に軍事戦争は弱まりつつあり、生産戦争が一応勝利のうちに一段落して、金融戦争に再び手痛い敗戦を喫した。国際戦争は軍事に限らず今後、更にいろいろの面で次々と行われると考えなければならず、先ず情報通信戦争が開始されている。これが更に拡大し、科学技術戦争になることは先ず疑う余地がない。

何れにせよ、軍事のみに限定しない国の安全保障を考えてゆかなければならない。軍事に限っていえば、軍備に狂奔する隣国がなければ、日本が軍備をするのは殆ど無駄になるから、軍備をするか否かは、相手次第で、

切り離して軍備の可否を論ずることは出来ないのではないだろうか。情勢判断がいる。国連軍の一部として運用すると云う考え方もあるが、そのためには、国連で「日本の論理」を通すだけの哲学を持っていなければなるまい。２１世紀の憲法としては広く多面に亘る国防の概念を以て、憲法第９条を書き直すべきである。米国が第二次世界大戦の開始に当って国家に対する叛逆罪に問われる危険に晒されながら日本が不法な奇襲を行ったようなかたちに嵌めたのは、民主主義国家としての国民の総意を纏めるための苦肉の策で、国力のある国での開戦の手続きである。日本のようにそれ程の国力がなく、何よりも狭い国での開戦は、嘗つてのオランダ・ベルギーなどの例に見るような、席捲を前提としての戦術にならざるを得まい。従って、その他の国防をも含めるようにして、軍事に限った国防に関する記述だけではない表現法を活用すべきである。

③　国民の差別行為を禁止しているのは当然であるが、本来は各個人の特長を活かした実力主義でなければならない。その上に身障者などに対する援助が含まれるのが当然であるが年齢に対する差別は依然として禁止されておらず、平然と年寄り引っ込めなどと云いに来る。このような現実は明らかに公平でないばかりでなく、国民の能力を充分に活用しなければならない国益に反することとなる。

④　要するに日本の理想とすべきことは、世界の他の国の人々から「日本と云う国はよい国ですね」といささかの尊敬と感謝の念をこめて云ってもらえるような国にすることである。こう云う国にしようと思うのが日本人の愛国心である。

○ 日本における科学技術は他の国とちがい唯一の生命線である。

○ 戦後築いて来た高生活水準を守ろうとすれば創造性の高い科学技術と製品を持たなければならない。

○ 科学技術は濫用さえされていたために、人間の心も環境も破綻を来しつつある。

○ 人間や環境の安全を保つことが科学技術の本質であって、サイエンスとヒューマニズムの融合体である。

○ 科学技術の研究開発には、よい撰択を行って、開発効率を上げることが緊急事項

○ よい撰択者を見付け出す最善の方法は事後評価を実施して、優れた事前評価者を撰別登用し、また優れた成果を挙げつづける研究者には、次々と研究を依頼する。当然研究期間を長くして、抜打評価を実施する。

○ ベル電話研究所のトランジスタ開発は、十一年間、失敗の連続だったが、継続され、研究開始したときも、何も旨くゆくという保証実験結果はなかったのに予算と計画が認められた。十一年目に当初予定と可成ずれた戦時研究班の電波探知機用ダイオードの開発の手伝いのとき、偶然にも増巾が発見され、これが切っかけとなって、バイポーラトランジタ、次いで最初目標にしたＦＥＴが実現され、展開の切っかけとなった最初のトランジスタは消滅した。

○ 他人のやっていないところから創造的な研究が生まれて来ることが多い。従来、この分野の研究で成功した例も日本には沢山にあったが、最近、トピックスに集まる傾向がつよく、トピックスを作る白川英樹先生の研究のような例に乏しいのは、早急に変えてゆかなければならなくなっている。

○ それと共に、従来の日本の産業化が、余り行なわれていなかったが、戦後、多くの開発成功例が出た。最近まで、生産中心の展開となって、再び、独自商品の国内のシードによる展開が極めて少なくなった。この原因はどこにあるだろうか。